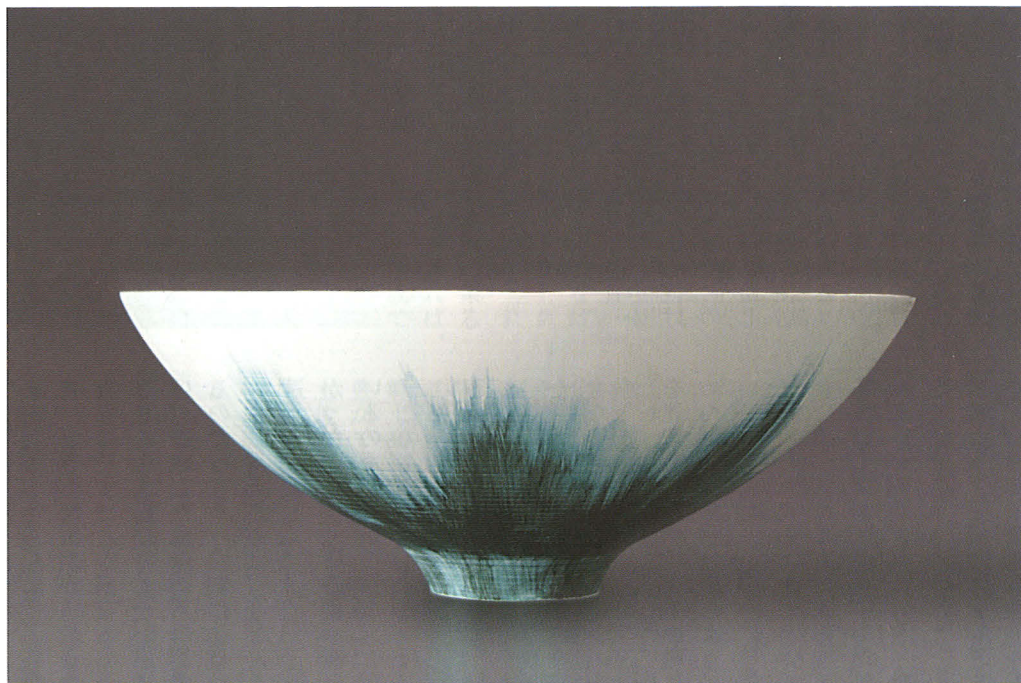


# 文化高知

2010年3月 NO.154



「碧の器」 西田宣生

## 〈もくじ〉

私にとって一冊の本 .....	松岡偉一	2
脱藩浪士の心意気 .....	小松弘明	3
絶対的な現場をどこに持つか? .....	小山登美夫	4~5
「高知市民ギャラリーの会」を閉じるにあたって .....	入交 啓	6~7
高知に「自然」はいっぱいあるのか? どこかおかし土佐の“売り方”(後編) .....	中内光昭	8~9
鉄道っておもしろい!(1) .....	大内雅博	10
言葉の現場から20 「抹茶アイス」のなぞを読み解く .....	広井 護	11
高知のギャラリー⑩ カマクラサンゴ Gallery蓮Ren .....		12
高知市文化振興事業団 1月~2月の事業から .....		13
風俗歳時記・風伯 .....		14~15

# 私にとつて 一冊の本

松岡 信一

も し私に一冊の本を挙げてくだ  
さいといわれたら、躊躇する  
ことなくV・E・フランク『夜と  
霧』（霜山徳爾訳、みすず書房）をあ  
げる。この本に出会ったのは、大学  
二年の半ば頃であった。それまで私  
は実存主義哲学に惹かれ、特にニー  
チエを取り憑かれたように読んでい  
た。私のために弁明させていただけ  
れば、それは私の年代、あるいはそ  
れ以上の年代の者にとって青春時代  
の典型的な在り方であり、私だけが  
例外ではなかったと思う。

私は何者であり、何を為すべきか  
という問いかけが、私を悩まし続け  
ていた。そんなある日、本屋でこの  
本に出会った。この本の末尾に綴じ  
られた写真は衝撃的であった。住居  
を追い出されナチスに連行されるユ  
ダヤ人少年のうつろな眼、収容所の  
周囲に張り巡らされた高圧電流の流  
れる鉄条網、効率よく人間を殺すた  
めのガス室、効率よく人間を焼くた  
めに考案された焼却炉、ゴミくずの  
ように積み上げられた元人間等々……  
すぐに購って下宿で一氣に読んだ。

あまりの衝撃に、その夜は寝られな  
かった。ニーチエを読んだときの震  
えとは別な感情が私を圧倒してい  
た。どうして人間が人間を虫けら  
のように殺すことが出来るのか。かろ  
うじて生き延びることが出来た人々  
は、体験した地獄から解放されてい  
るのだろうか。殺戮に加わったドイ  
ツ軍の兵士たちは、どんな生活を  
送っているのだろうか。何事もな  
かったかのように子供や孫と戯れて  
いるのだろうか……

このように『夜と霧』は、私に強  
い衝撃を与えたが、心のどこかで、  
「これは日本人ではなくドイツ人が  
したことなんだ」という思いがあっ  
た。ところが『夜と霧』を読んで間  
もなく、ジャーナリストの本多勝一  
が、『朝日新聞』紙上に「中国の旅」  
を連載し始めた。大量虐殺により埋  
められた死体が地層のようになって  
いる「万人坑」、あるいは生きたま  
ま埋められたのであるうか手足が針  
金で縛られたままの死体の写真、生  
体実験（解剖・細菌）の話等々。中  
国人への虐殺行為は、ドイツ人では  
なく、まぎれもなく私にとって親の  
世代にあたる日本人の仕業であっ  
た。今はごく普通に生活をしている  
日本人の仕業であった。

（まつおかきいち／高知市立自由  
民権記念館館長）



問わず、ごく普通の人間が条件さえ  
整えばいつでも悪魔に魂を売り渡す  
ことのできる存在であることに気づ  
いた時のショックはあまりに大き  
く、しばらくは何もできなかった。  
私もまた条件さえ整えばそうなるの  
か……



小松弘明

日本売れる仕組みづくり一般財団 理事  
ソフトブレン・サービス株式会社 会長・成長企業プロデューサー

# の士浪藩 気意脱藩 心

この二年、僕の帰省に新たなス  
タイルが付け加わった。

高知龍馬空港に到着すると、空港  
からほど近い高知大学農学部のある  
物部キャンパスに直行する。高知大  
学で実施している「土佐フッドビジ  
ネスクリエーター(FBC)人材創出」  
事業の講師として「営業マーケティ  
ング面からの人材育成」について講  
義するためだ。二〇〇八年から始まっ  
たこの事業は、高知の豊富で安心安  
全な食材をつかった付加価値の高い  
食品加工業（一・五次産業）の創出  
に向けたプログラムである。生産・  
加工・流通・販売を一貫してつなげ  
る人材創出と、人材のネットワーク  
づくりを大きな目的としており、す  
でに大きな成果（実際の流通に乗る  
商品化）が出ている。長い目でみれば、  
雇用創出という大きな目標も達成で  
きるものと確信している。

僕は地方公務員の家庭で育ち、大  
学入学と同時に東京に出て、そのま  
ま就職した。高知県の課題のひとつ  
として、高校卒業と同時に県外に出  
る若者が約五〇％、その大半が県外  
で就労することがあげられるが、僕  
も高知県の抱える課題を作った一人  
であると言える。幕末の「脱藩浪士」  
となんら変わりないと、いろいろな  
セミナーでもしゃべっている（笑）。

就職・雇用に対する不安と都市型生  
活に対するあこがれがないまぜにな  
って故郷に親が残るとい形にな  
るのだ。しかし優れた情報や経済は  
都会に集中、特に東京一極集中に  
なっているため、こうした問題は高  
知特有のものとは言いがたい。だろ  
う。高知の課題を解決することは、  
日本の課題を解決することに等しい  
のである。その点からも、FBC事  
業の意義は大きい。

グローバル化の進展、インター  
ネットの発達による情報革命、高齢  
化社会の到来は、日本社会の価値観  
や経済状況を変化させている。これ  
までの大量生産・大量消費の時代は  
終焉をむかえ、地球環境にやさしい  
ことが求められる時代が始まった。  
郷土高知を振り返ってみれば、自然  
豊かで、心豊か。人が人にやさしい  
土地である。「食」の面からみれば、  
生産量は少ないかもしれないが、高  
付加価値化できる食材の宝庫であ  
る。大袈裟で手前味噌に聞こえるか  
もしれないが、「土佐の時代」が来  
るとい予感さえ湧いてくるのだ。  
時代にマッチし、県民がすこやかに  
暮らせるためには、高知を経済的に  
も活性化させる必要がある。「貧すれ  
ば鈍す」という言葉があるが、人に  
対する投資＝教育・人材育成ができ

ないと国は滅ぶ。経済的にも余裕が  
ないと人材は育成しづらくなる。  
中国「春秋時代」の書物の「管子」  
にはこう書かれている。  
一年の計は穀を樹うるに如くはな  
し、十年の計は木を樹うるに如く  
はなし、終身の計は人を樹うるに  
如くはなし。

一年で国を發展させようとするなら  
ば穀物を作るのが手っ取り早い、十  
年で考えるならば木を植えなさい。  
住居にも燃料にも必要だから。でも  
未来を考え、継続的に計画するなら  
ば、人材を育成していくしかない。  
といった意味に解している。我が郷  
土土佐がこれからも心豊かな国であ  
りつづけるためには、「人材育成」に  
力を注いでいかなければならない。  
僕も微力ながら高知出身者として貢  
献し続けていきたいと思っている。  
国許からお許しができるように……

（こまつひろあき）

1961年高知県生まれ、1984年早稲田大学法学  
部卒業、三和銀行（現三菱東京UFJ銀行）に入行。  
2000年ソフトブレン入社。ビジネス書のベスト  
セラー「やっぱり愛した日本の営業」著者、宋文州  
と5年間同社を、一部上場企業に成長させる。銀行員  
時代を含め、多くの経営者からの相談を受けるなど、  
営業プロセスマシナリーに関するコンサルティングで中堅・  
中小ベンチャー企業を経営者からの支持も高い。

**高**知には、以前に勤めていたギャラリーのときに、数回訪れたことがあります。高知県立美術館開館後に、そのコレクションのために作品と一緒にやってきては、街の居酒屋でカツオのたたきと高知の日本酒を楽しみ、川端でおいしい餃子をほおばったことを思い出します。桂浜に行くと思いを越す大きな坂本龍馬の銅像があり、その足下の遊泳禁止の海岸で何故か何人かの水着姿の人が戯れていました。朝市も堪能し、そんな観光地としての高知を楽しみました。

それから十五年あまりを経て、久しぶりに、昨年今年と再び高知に来ることになりました。その間に、私は自分のギャラリーをオープンして、自分と同世代のアーティストの展示会をし、なんとかその作品をアートのマーケットに残して後々の歴史になるように種をまく、というような仕事をしてきました。

回り、さらに審査をするということをやっている、若いアーティストの人たちの作品を見ることが積極的になってきました。それがあって、今回の審査にも呼んでもらえたのだと思います。

なぜ、若い人たちの作品を見るのか、というと、何か新しい面白い作品を見たい！ということにつきるでしょう。でも、審査をしたり、ギャラリーを運営していく過程で思ってきたことは、自分は天才を見たいのではない、才能を持ちながらも、その感覚を的確に掴み、かつ技術と経験をふまえてひとつの表現にしているには、ある程度の時間が必要な

第5回 美術作品  
コンクール

絶対的な現場を  
どこかに持つか？

コヤマトミオの見た高知

小山登美夫



ではないか、ということですが。卒業展、修了展を見始めたのも、若い人たちに、それで終わりとせず、もう少し制作をやめないで自分の興味のあることを続けてほしいという思いからでした。それはもちろん、ギャラリーで展示、販売するという自分の仕事に繋がることがありますが、一方でアーティストは職業なのか、という問いもあります。

よく、「小山さんは売れるアーティストだから展示会をするのですか？」と聞かれますが、その視点でアーティストを選んだとしても、最終的に売れることにならないのです。作品はと視点が、多くの経験から成り立ち、自分のものになっているということに大事にしました。今後開くことになる個展で、彼の生活からくる時間、空間の感覚が、その技術と経験を通して、人にうまく届くことができることを願っています。自分の住む場所、生きた時間、入ってくる情報が、濃ければ、そして濃くしていけば、その場所が絶対的な現場として制作に繋がっていくことになる、と信じています。

こやまとみお / 小山登美夫ギャラリー代表・明治大学国際日本学部特任准教授

の藤田館長が、リュミエールの主たる映画が一日で見ることができるといふ凄く企画をしていたりとか、「沢田マンション」を根付作家の森謙次さんに案内してもらって、その奇天烈ぶりに圧倒されたりとか、ギャラリー「グラフィティ」などで多くの地元のアーティストたちが展示会をして、そこになんとなくぶらぶらいたりして、東京で逢う高知ゆかりのアーティスト、大木裕之さんや竹崎和征くんの片鱗を見た感じがしたりして、濃い空間が作られていることが実感できたのです。

このコンクールの出品者は、高知

作品であり、商品ではない。当たり前のことですが、どこかで、こんがらがってしまうのが、美術の難しいところでもあり、面白いところです。アーティストが「作品」として自分のモチベーションをきちんと持ち、試行錯誤を繰り返し、自分の題材、技法、素材、大きさをしっかりと掴み、作品を作る、そして、そのモチベーションをキープしながら、もしくは変遷させながら、作品を作り続けていく、そのときにこそ、アーティストとしての表現が成り立ち、歴史へと一歩近づいていくことなのだと思います。

十五年ぶりの高知は、以前と全く違う顔を見せました。「悪魔のいけにえ」が最高傑作だと豪語する美術館

～第5回美術作品コンクール受賞作品～



最優秀賞  
「日々 Fairy Tale」 横田 章



優秀賞  
「みかんの木がある風景」  
上村菜々子



優秀賞  
「忘れられない事」  
柳百合早子

# 市

民生活の隅々にまで広い行政  
 守備範囲を受け持つ自治体と、  
 ある要求を掲げてそれを実現するた  
 めに結集した市民団体との、双方  
 共に望ましい関係とは、どんな関係  
 を言うのだろうか。資金的に余裕が  
 ない自治体にとって、多様な行政需  
 要をすべて満たすことはとても不可  
 能なことだし、最近はやりの事業仕  
 分けをしようにも、市民から出され  
 る要望はどれをとっても必要なもの  
 ばかりだ。だからどれも簡単にポツ  
 にするわけにはいかない。そんな環  
 境下で高知市の文化プラザ「かるぼー



## 「高知市民ギャラリーの会」 を閉じるにあたって 入交 啓



と」は造られた。まさに高知市にとっ  
 ては、半世紀に一度あるかないかの  
 大プロジェクトだった。

高知市の複合文化施設の建設構想  
 が始まったちょうどその頃、県内の  
 美術家たちがひとつの団体に結集し  
 て、公設ギャラリーの建設運動に立  
 ち上がったことも幸運だった。もし、  
 市の決断が数年遅れていれば、今の  
 「かるぼーと」の姿は見られなかつ  
 たかもしれないし、美術家たちの運  
 動がなければ現在の規模のギャラ  
 リーやアトリエは日の目を見ていな  
 かつたかもしれないのだ。

さて、その「かるぼーと」が立ち  
 上がって十年が経った。「高知市民  
 ギャラリーの会(以下、「会」という)」  
 が「かるぼーと」を本拠に、会員展  
 の開催を始めて、今年で九回目(上  
 四ポプラ会館)を会場にしていた時

代からは十七回目)である。もとも  
 とこの「会」は、「かるぼーと」が  
 まだ存在しない時期(一九九二年)  
 に、美術家たちが中心となって、作  
 品を気軽に発表でき、かつ鑑賞でき  
 る公設ギャラリーの建設を求めて、  
 発足した団体(高知市民ギャラリー  
 をつくる会、大平武夫初代会長)だっ  
 た。最盛期には千人を超える会員で  
 構成されていたというから、美術家  
 だけではなくて一般市民も幅広く  
 入っていたはずだ。

高知市に漫画館やホールを含む文  
 化施設の建設構想が動き始めた時期  
 に重なったことは先に述べたが、さ  
 らにもう一つ幸運が重なったのは、  
 「会」の要望を当時の行政当局が真  
 摯に受け止めてくれて、市民参加で  
 建設計画を練り上げることができた  
 ことだった。

とはない。要するに交り合うこと  
 がないのが普通なのだ。  
 だが、「かるぼーと」の場合は違っ  
 た。高知市は基本構想の段階から「会」  
 の意見を聞く立場に徹して、うまく  
 美術家たちの創造的パワーを引き出  
 した。また団体側も連帯的立場から  
 理想とする提言を行った。いわば行  
 政と市民団体とが創造的協力関係を  
 つくり上げていったと言えようか。  
 構想から実施設計へ、そして設計変  
 更なども含めて、三十回を超えるワー  
 クショップを行いながら計画を煮詰  
 めていったのだから、これは稀有な  
 ことだった。「かるぼーと」は全国に  
 類例のない、文字どおり住民参加で

造られた文化施設なのである。  
 こんなかたちででき上がった施設  
 であるから、「会」と会員にとって「か  
 らるぼーと」は特別に愛着のあるわが  
 子のような存在だ。だから「かるぼー  
 と」が竣工して以後も「会」を閉じ  
 ることなく、毎年一回の会員展、会  
 員によるグループ展、個展や、ある  
 いは「高知市展」などにも力を入れ  
 てきた。

今では約二百五十人、会員展への出  
 品作家も百五十人ほどに激減した。  
 故大平会長を含めて物故された会員  
 も多く、高齢化が進んだことが主た  
 る原因だが、「かるぼーと」も市民  
 県民の間にすっかり定着し、「会」  
 としての出番、役割もほぼ終了した  
 というのが会員の大方の判断なの  
 だ。もちろん「会」を閉じて美術  
 家、作家として創作し発表するのは  
 これまでと同じだから、「かるぼー  
 と」はこれからも高知の芸術の発信  
 拠点として利用され続けていくこと  
 だろう。



作って味方を増やし、そのパワーを  
 背景に上層部と掛け合うくらいの大  
 胆さが欲しい。ここで幕を下ろす「高  
 知市民ギャラリーの会」だが、そん  
 な「文化振興事業団」を応援し続け  
 ていきたいのだ。いつかまた出番が  
 くることを信じて。  
 では、いったんさようなら。

(いりまじりあきら／高知市民ギ  
 ャラリーの会事務局長)

ところがこの「会」も、今年の九  
 回展(ポプラ会館時代を含めれば通  
 算十七回展)を終えた段階で幕を下  
 るすことを決断した。かつて千人を  
 超える会員を擁したこともあったが、  
 ただ、文化は人が創り出すものだ  
 から、人が減り続けている高知の現  
 状の向こうに何が待っているのか心  
 配だ。県も市も必死にやっているこ  
 とは分かっているが、人々の顔に笑  
 顔が浮かんでこない。しかし悲観ば  
 かりでは何も生まれてこない。そこ  
 で、お世話になった高知市文化振興  
 事業団の皆さんに最後に望みたい。  
 高知の街の一步先を再イメージし、  
 大胆かつ具体的な文化振興策を考え  
 て提案してもらいたいのだ。「かる  
 ぼーと」の中にちんまりこもって配  
 分された予算を消化するだけでは、  
 何のための「文化振興事業団」とい  
 うことになりはしないだろうか。金  
 のことは関係ない。野心的な計画を



# 高知に「自然」は いつばいあるのか？

## どこかおかしき土佐の「売り方」(後編)

中内光昭



ウラゴマダラシジミ (濱田 康氏撮影)

**筆** 者は本誌前号で、高知県の「太陽光発電効率『日本一』」をもっと自慢すべきだと提案した。今回は、これとは反対に、世間で自慢されている土佐の自然を冷静に眺めたい。本当に土佐には「自然がいつばいある」のか？ 己を知らずに自慢するのは恥ずかしいことであり、滑稽でもある。

### 「自然」と「人工」

「自然」は「人工」に対することばであるが、日常的な意味では、両者は必ずしも背反的な関係ではなく、複雑にからみあって「共生」す

ることができる。人間の文化生活は、原野を拓き、土地を均らし、陸水を制御するなど、さまざまな自然破壊により初めて可能になる。このような「破壊」は、それが一定限度内であれば、自然はそのしたたかな対応力や復元力でのその営みを続ける。逆に、破壊がその限度を超えると自然は復元不能となり、種は絶滅し生態系は崩壊する。

私は前著(註1)で、その限度のことを「分」と表現した。分とは「分け前」のことである。人類は長い間、分をわきまえて生活してきた。動物種の一つに過ぎない人類が、近年になり、分をわきまえずに自然を破壊

した結果が地球の現在の姿である。この視点で高知県の山と海の現状を見てみよう。

### 山の自然

県面積の八四%を占める山林の六六%はスギやヒノキの人工林である。単一樹種の人工林は、天然芝を敷き詰めたゴルフ場と同じで、緑はあっても「自然」はない。自然の森林では微生物、昆虫、鳥類など多様な生き物が複雑なネットワークを作り、一種の平衡状態(生態系)を維持している。そのような「生きた山」は、川を経て、遠い海を育てる力を

田康氏の話では、以前この山で見られた約六十二種の蝶のうち、写真のウラゴマダラシジミやミカドアゲハ(註4)を含む十七種が姿を消している。昆虫の減少は全国的な現象ではあるが、とりわけ高知県でのひどさが虫屋(昆虫採集愛好家)の話題になっているのは淋しい現実である。

### 海

高知県の湾内や沿岸部の生き物もめつきり減った。戦後しばらく、浦ノ内湾には色とりどりの生き物が群がっていたが、今では「海のお花畑」と呼ばれていたが、今では「海の沙漠」という陰口さえ聞かれる状態である。

外洋の沿岸部でも、県西南部のように、陸水の影響が少なく、海水が外洋水とよく交換される海域を除き、いわゆる「磯焼け」が進行し、かつては、海藻、カイメン、フジツボ、貝などに覆われていた岩礁がほとんど露出状態になっている。「磯焼け」の原因をウニやヒトデなどの異常発生に求める人もいるが、筆者は海全体が病んでいるためと考えている。海の汚染の実態や原因については、前著(註5)で述べているので、ここでは結論だけを紹介する。

沿岸や湾内の海水の汚染は「複合

汚染」で、特定の原因だけに罪を着せることはできないが、生物にとつて致命的な影響を与えるのは、農薬や家庭洗剤と共に、それらを溶かしている界面活性剤(以下単に活性剤)であると筆者は考えている。多量に流入する活性剤により、貝、カニ、ウニなどの卵は正常に発生できない。その結果、それらの成体が育たないだけでなく、貝などの子ども(幼生)を食べている生物も生きていけない。つまり、海の食物連鎖が底辺から壊れてしまうのである。この事実は、逆に活性剤の流入を防げば海の汚染は劇的に改善されることを意味している。

### 「公共事業」が自然を救う

以上述べたように、現在、土佐の

自然は極めて憂慮すべき状態で、「豊かな自然」などとは、とても恥ずかしくて言えない。原因の一つは県土の特殊性で、平地が少なく、山は急峻で、無理な開発が必要になる。加えて、何事も「いい加減」が嫌いで「徹底的」が好きな県民性が自然の破壊に一役買っていることも考えられる。

有り難いことに、自然にはたたかな修復力がある。絶滅種の復元は無理としても人間生活と共存できる「自然」は取り戻せる。かつて、褐色に濁っていた東京湾にも最近多くの生物が戻ってきている。浦戸湾の生物もひと頃比べると遙かに豊かになってきたようである。これらは流入する下水の処理が進んだ結果であることは明瞭である。

山に「自然」を取り戻すためには、役目を終えた人工林を順次広葉樹林化しなくてはならない。その場合、住民の生活との両立に配慮し、潜在的な経済力(果実、薬効成分、キノコなど)を持つ樹種を選ぶことも大切であろう。里山の自然もある程度は修復可能である。前述のミカドアゲハも食樹のオガタマを植えれば戻ってきてくれるだろう。

河川の浄化について、本県では「四万十川方式」と言う、自然の浄化作

持っている。人工林は山地に作られた工場のようなものである。かつて本誌(註2)で、野鳥カメラマンの和田剛一さんが「土佐には山も木も川もいつばいあるけど、自然はないね」という友人の言葉を紹介しているが、返す言葉がない。

都市周辺の里山も宅地や墓地などの開発で自然破壊が進行している。小高坂山は高知市中心部の西北にある典型的な里山で、雑木林の中に、畑墓地が点在する。かつて、ここには多様な昆虫が見られ、昆虫少年たちにとつて大切な採集場所だった。少年時代からこの山の「むし」と親しみ、トンボの名著(註3)で知られる濱

都市の汚水は通常の下水道処理システムに依るのが理想的ではあるが、これだけに頼ることは、事業費、住民の合意、完成までの時間などを考えると現実的ではない。集落の実態に応じて、本格的下水道構想を念頭に置きながら、戸別の合併処理槽や小集落の小規模処理施設など現実的な処理システムを併用して構築するのが望ましい。

以上の施策は、いわば、極め付きの「公共事業」である。莫大な費用がかかるが、建設業が潤うだけでなく、住民も漁民も大変な恩恵を受ける。水産業が栄えれば、関連企業や観光まで県全体が元気になる。そして、初めて「土佐には自然がいつばいある」と自慢することができるようになる。

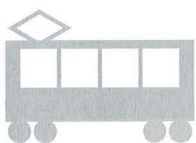
(なかうちみつあき/高知大学元学長)

註1 中内光昭「ラロンの世界」一九九九 岩波書店  
註2 和田剛一「自然の豊かな高知県?」文化高知 一三三頁、二〇〇三 高知市文化振興事業団  
註3 濱田康・井上清「日本産トンボ大図鑑」一九八五 講談社  
註4 地域(高知市の一部)指定の特別天然記念物  
註5 中内光昭「旅路来」二〇〇七 南の風社



ミカドアゲハ (濱田 康氏撮影)

# 実は便利な 高知の鉄道



— 少ない需要を逆手に取ったバリアフリー —

大内 雅博

**高** 知の鉄道は列車本数が少なく、しかも遅い。JRには電車が走っておらず、今どきディーゼルである。日中の普通列車は一両編成があたりまえで、特急列車も三両編成が標準で、二両のものもある。私のような関東地方に生まれ育った人間の鉄道観を見事にひっくり返して

く



JR 高知駅に乗り入れている土佐くろしお鉄道ごめん・なはり線の展望車両

れる。旅客需要が少ないからこうなるわけである。県内で最も賑わっているJR高知駅の乗降客数は一日当たりわずか一万人である。ちなみに日本最大のJR新宿駅の乗降客数は一五〇万人である。

とはいえ、旅客が少ないなりに、そして、少ないことを逆手に取って気の利いたサービスをしているのが高知の鉄道である。

土佐くろしお鉄道のごめん・なはり線は、もともと国鉄阿佐線として建設されたが、需要が見込まれないことから第三セクターが経営を引き受け、二〇〇二年に開業した。最後のローカル新線」と呼ばれている。

当線の起点は高知駅から一〇・四キロ離れている後免駅であり、高知駅ではない。しかし、二十七往復の

列車中十六往復がJR土讃線を経由して高知駅に乗り入れている。この乗り入れの割合はかなりのものである。乗り換えなしのサービスは鉄道の利用を促進させる大きな要因であると思うが、それが可能なのは、土讃線自体の輸送需要が多くなく、一両編成のローカル線が乗り入れても支障ないからであると思う。

土佐電鉄は「はりまや橋」で交差する東西二二・一キロ、南北三・二キロの二路線合計二五・三キロの路面電車である。意外にも、「路面電車」として免許を得ている路線の長さは全国一である。

南北に走る「棧橋線」は高知駅を起点としている。連続立体交差化が相成ったJR高知駅の真正面に乗り入れ、改札口から水平移動のみで乗車できるのは特筆すべきである。これもJR高知駅の規模なり乗降客数がそれほど多いわけではなかったから可能になった「バリアフリー」であろう。

一方、県庁や市役所などのある高知市の主要な市街地ははりまや橋西側の「伊野線」にあり、通常は高知駅からは「はりまや橋」での乗り換えを必要とする。棧橋線と伊野線と

JR 高知駅の真正面に乗り入れている土佐電鉄の路面電車



はりまや橋交差点を「右折」中の高知駅発栴形行き電車



の相互乗り換えには交差点を二回横断しなければならぬ。そこで二〇〇五年に、はりまや橋交差点を「右折」して西方向に乗り入れる線路が設けられ、平日は十八本、土休祝日には十六本の乗り換えなしの直通電車が走るようになった。もちろん、逆方向の電車も走るようになったが、こちらは従来から設置されていた「左折」用の線路を通る。

人口が少ないのは鉄道の経営、ひいてはサービスにとっては不利である。しかし、その不利な条件を逆手に取って、人口の多い地域よりも質の高いバリアフリー実現可能性を高知の鉄道は身を以って示していると思う。

（おおうちまさひろ／高知工科大）  
学准教授

## 言葉の現場から 20

広井 護

# 「抹茶アイス」のなぞを 読み解く

過日、テレビニュースでオバマ大統領の東京演説の冒頭を聞き、「抹茶アイス」のジョークに感銘を受けた。「抹茶アイス」の深層の意味を読み解いてみたい。以下の部分だ。

幼いころ私が母に連れられて鎌倉を訪れたことをご存じの方も、あるいはあるかもしれません。そのとき私が見上げたのは、何世紀も前に造られた平和と平穩の象徴である青銅の大仏像でした。もともと、子どもだった私は、抹茶アイスの方に目がくぎづけになっていました。(笑い)

…when I was a young boy, my mother brought me to Kamakura, …… the great bronze Amida Buddha. And as a child, I was more focused on the matcha ice cream. (laughter). (東京演説より)

この「抹茶アイス」のジョークは秀逸である。(ふつうの)「アイスクリーム」ではなく「抹茶アイス」であることがポイントだ。もしオバマ少年が、西洋的、アメリカ的な(ふつうの)「アイスクリーム」の方に目がくぎづけ (focused on) になっていたというのなら、鎌倉の大仏に對する大統領の敬意も、かなり減殺されてしまう。(日本的な)「抹茶アイス」への言及には、日本文化への好意がこめられている。「大仏像」と「抹茶アイス」はセットで、日本的、東洋的なものへの自然な敬愛を表明しているのである。

では、「みたらし団子に目がくぎづけになっていた」という表現だけならどうだろう。これでは、うそくさくなる。抹茶アイスだから少年らしいリアリティがあるのだ。「抹茶アイス」のジョークは、社交辞令に血を通わせて、生きた言葉に変える見事な触媒になっている。

オバマ大統領が言葉の大切にする政治家であることが、演説の細部からも読み取れる。

ところが、私には一つの疑問が残った。—— ハワイで育ったオバマ少年にとって、抹茶アイスは、本当に目がくぎづけになるほど美味しそうに見えるものだったのだろうか。むしろ異様なアイスクリームに見えるものではないだろうか。だから目がくぎづけになったのではないか。その味も、「へんな味」だったのではないか。だから、大人になっても覚えていてのではないだろうか。

そんな思いが頭をかすめた。これは私自身の経験に起因している。二十年ほど前に、伊豆半島の天城峠の茶店で「わさびソフト」という(わさび入りの)ソフトクリームを食べたことがある。その色と味は今でも鮮烈に覚えている。緑色の異様な味のソフトクリームだったが、食べているうちに、(ある程度)美味しいと感じられるようになった。それと似た経験をオバマ少年もしたのではないかと直感したのである。

新聞報道によれば、オバマ少年が日本に立ち寄ったのは、それまで育ったハワイを後にして、インドネシアで暮らすための旅の途上であった。少年は心細かったはずだ。そのことを踏まえると、以下の仮説が浮かんでくる。

抹茶アイスの味は、最初は異様な

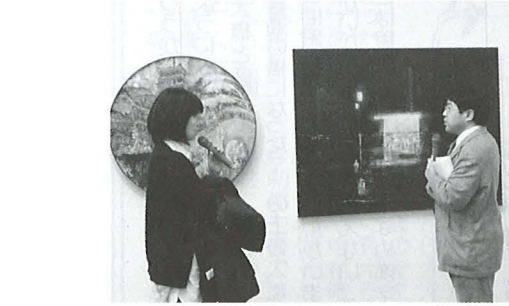
味だと感じられたのではないか。それはオバマ少年に生まれてはじめての異国を感じさせる味だったはずだ。あるいは、ほろにがい孤独を……

だがそのへんな味をアメリカ的なアイスクリームの甘さが緩和してくれた。抹茶味とアイスクリーム味の調和。それは独特の東洋的な風味となつて少年の口中に広がった。「アジアでも、ほくはやっていける。」そのとき少年は思ったのではないか。そして心細さから解放されていた。この体験ゆえに、抹茶アイスは大統領にとって特別な存在となつていった。だから東京演説の中で鮮やかに蘇つたのではないだろうか。

この仮説の妥当性を検証するため、「オバマ大統領 抹茶アイス」というキーワードで、ネット検索したところ、岡田かつや外務大臣の公式ブログがヒットした。十一月十七日の「抹茶アイスーオバマ大統領の来日、食事会での1コマ」という記事だ。その中で岡田大臣は、日米首脳会談後(東京演説前夜)の晩餐会で、抹茶アイスを出されたオバマ大統領が劇的な反応をされたようすを克明に描写している。このブログを読んで、私の仮説は確信に変わった。(みなさんも、ぜひご覧下さい。)

仮説を立てて、それを検証する。これも、読みの醍醐味の一つである。

(ひろいまもる／土佐中学校教諭)



高知市文化振興事業団は長期的な目標のひとつとして「芸術文化を創造する人材の支援・育成」に取り組んでいます。その中の「芸術分野における地元アーティストの作品審査・展覧会の支援」は平成17年度に創設され、「美術作品コンクール Concours des Tableaux」として今年で5回目を迎えました。

今年は応募人数、応募点数とも過去最高となり、高知県在住・出身（18歳以上35歳未満）の50名から出品された68点による応募作品展を行いました。小作品が多かった第4回と比べ、今回は100号以上の大作が68点中17点と1/4を占め、会場は若い作家の情熱に溢れた空間となりました。

応募作品展を毎年楽しみにしている方も増えてきたようで、「今年はどの作家さんも気合いが入っているね」といった感想をいただきました。また、前もってまずご自分でじっくり鑑賞して、作品展最終日の公開審査に再度来場し、審査員と作家の対話を聞きながらもう一度絵を見る、といった熱心な方も多くいました。

1月24日に行った公開審査は、現代美術の語り手として欠かせない、ギャラリストの小山登美夫氏を審査員としてお迎えしました。展覧会会場で作家と対話しながら作品を見ていくこのコンクールの審査方式も定着したようで、自分の思いや制作方法について語る作家や、それに対してアドバイスや感想を述べる審査員のお話を、多くのお客様に聞いていただきました。

最優秀賞（賞金30万円）に横田章さん（32歳）「日々Fairy tale」が選ばれ、上村菜々子さん（22歳）「みかんの木がある風景」と柳百合子さん（25歳）「忘れられない事」がそれぞれ優秀賞（賞金5万円）を受賞しました。最優秀受賞アーティスト・横田さんの作品展は、22年度の高知市文化振興事業団主催の企画展として本年12月に開催する予定です。

第5回美術作品コンクール

Concours des Tableaux

1月19日（火）~24日（日） かるぽーと市民ギャラリー（第1・2展示室）

最優秀賞 「日々Fairy Tale」 横田 章

これまで個人的な記憶の再配置をテーマに「日々」という同一タイトルで制作に取り組んできました。今回の作品は、制作中自分の記憶を手繰るなかで、自らの思い出や記憶を「日々」も昔話＝「Fairy tale」と同様に語り手やロケーションにより変化することを感じました。タイトルはこのふたつの言葉を組み合わせ「日々 Fairy tale」としました。新たな展開を迎えたことで今まで内に向かいがちだった表現が自然に外との関係を築くようになり、自分にとって新たな場面に向かっているように思えます。

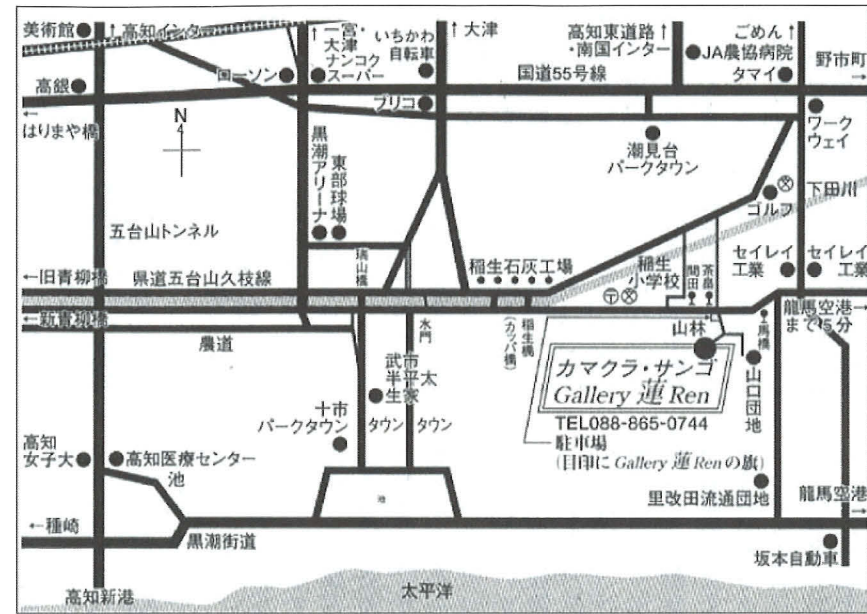
受賞者のことば



悠々とした田園風景の広がる南国市の稲生に私たちはカマクラサンゴギャラリー蓮を開いています。元々はサンゴ商品の制作、卸しを主軸にしていました。サンゴは高知の古くからの地場産業でした。けれどもそんな背景と伝統を持っているにも関わらず、近年は直接見て、手に取って感じる、サンゴの魅力を知っていただける機会がめっきり少なくなってきました。

そんな中、一九九八年春、住居兼カマクラサンゴの工房であった我が家にギャラリー蓮を開設しました。工房・プライベート空間と隣り合わせのため、独特のアットホームな雰囲気を持つギャラリーになっており、不意に迷い込んだようにいらっ

カマクラサンゴ Gallery蓮Ren



カマクラサンゴ Gallery 蓮 Ren  
南州市稲生 34-3 電話 088-865-0744  
営業時間 10時~18時(冬)  
9時30分~18時30分(夏)  
<http://www6.ocn.ne.jp/~cjac-ren/>

(蓮Ren一回)

駐車場の大きな雑木林に囲まれた立地ですので、ホームページにて近隣マップもご確認いただけますが、電話でもお気軽にお問い合わせください。心よりお待ちしております。

展示会も開催しています。ギャラリー蓮Renの代表を務め作家である鎌倉通孝との二人展、グループでの蓮Ren展など、宝石珊瑚を中心とした立体作品と、陶芸・絵画などを展示してきました。これから徐々にサンゴ工芸だけでなく全国から様々なジャンルの作家をお招きし紹介していきたいと思っています。皆様喜んでいただけるギャラリーをめざし努力をしています。

しやるお客様も珍しくありません。近代的なギャラリーではないですが、喧噪を離れた和みある空間に好評をいただいています。

ギャラリーで展示しているのは、洋のコーラルジュエリー、和の装身具、工芸美術品、仏具や小物などな

ど。クオリティの高さは他に類を見ないと自負しています。体温を感じさせる色彩と質感を持つサンゴの魅力を十二分に生かし、従来のイメージから一線を画した私たちの提案をご覧ください。

年に二、三回、一、二か月の期間

で展示会も開催しています。ギャラリー蓮Renの代表を務め作家である鎌倉通孝との二人展、グループでの蓮Ren展など、宝石珊瑚を中心とした立体作品と、陶芸・絵画などを展示してきました。これから徐々にサンゴ工芸だけでなく全国から様々なジャンルの作家をお招きし紹介していきたいと思っています。皆様喜んでいただけるギャラリーをめざし努力をしています。

# ホリカワ アート ミーティング"Spring

2010.5.3 mon 11:00~18:00

高知市文化プラザかるぼーと 前広場

※雨天時は市民ギャラリーにて開催

かるぼーとの前を流れる堀川沿いを会場に、  
県下最大級のアートフリーマーケットや  
マイ箸作りやオリジナル楽器作りワークショップ、  
人気バンド・ナチュラルナンバーのライブなど  
気楽にアートを楽しむプログラムを取り揃えました。

■主催：(財)高知市文化振興事業団・ART NPO TACO  
■お申し込み・お問い合わせ：(財)高知市文化振興事業団 088-883-5071

## 風俗

### 満たされない「今」

たまに古本屋さんを覗く。十年、二十年も前に話題となって、いまでは新刊書店でお目にかかれないうような本にでくわすことがある。文化人類学者で「ナマケモノ倶楽部」世話人である辻信一の『スロー・イズ・ビューティフル』（平凡社二〇〇一年刊）という小さな本を見つけた。

当時の日本でもずいぶん流行った「スローフード」や「スローライフ」の解説だけでは終わっていない。パートランド・ラッセルの勤勉思想の危険性を警告し、現代人はいまなお勤勞の呪縛のもとに喘いでいるとする『怠惰への賛歌』（一九三二年刊）や、多田道太郎の「怠惰の思想」（『物くさ太郎の空想力』）のこと

などなかなか面白い。確かに私たちは「目的」だとか「目標」などに縛られて、「ただ休む」ことや「ただ遊ぶ」こと、「ただ歩くために歩く」ことは台詞だとされ、「何事も何か他の目的のためになすべきで、それ自体のためになすべきでない」と退けられるのだ。

辻信一は「今はそれどころじゃない」とか「こうしてはいられない」の「今」や「それ」に代わる、よりふさわしい何かによって満たされることはなかなかない。だから大人たちの「今」はいつまでも空っぽのまま。子どもたちの目にはそれがよく見えるのだろう、という。

そして中村隆一の言葉をひいて、「今さえよければそれでいい」という投げやりな利那主義ではない「将来のために今を犠牲にするのはもうやめよう」という。仕事をし、問題を解決することで充足している私たちの「今」は、結局いつまでも満たされることはない。

(霖)

# 文化高知

定期購読のご案内  
賛助会員募集中!!



賛助会費  
2,000円  
(年額)

財団法人 高知市文化振興事業団の  
機関誌「文化高知」を  
年6回お手元に。

お申し込みは・・・  
事業団にお電話でどうぞ。  
次号に郵便振替の用紙を  
同封してお届けいたします。

お申し込み・お問い合わせ  
(財)高知市文化振興事業団  
Tel 088-883-5071  
毎週月曜休業（祝休日は除く）

## 今号の表紙

### 「碧の器」

西田宣生

磁器を手掛けるきっかけとなったのは、愛媛の砥部陶石との出会い。轆轤との対話から生み出されるシャープで緊張感のあるフォルムに、釉薬を刷毛目でラフに塗る方法を思いついた時に形を成した「碧の器」シリーズ。高台が小さく口の広がり不均等な「自分の形」を今も模索中である。

(にしだのぶお/陶芸家)

## 高知を撮る

第25回写真コンテスト入賞作品

### 高架開通の朝

(平成20年2月26日 高知市)

戸田 武男



いつのころからだろうか、四万十川が小さく感じられるようになったのは、そこに架かる橋も、大橋と呼んできたイメージは失せて、普通の橋になった。恐ろしいほどの深さに思えた淵も、さほどではなく、あらいがいた荒瀬も、抗して泳げぬ早瀬とは思えない、平凡な瀬に見える。

実際に川が細り、橋が小さくなり、淵が埋まり、瀬がゆるくなったのではない。昔と変わらぬ川幅であり、淵の深さであり、瀬の流れである。物理的条件を厳密にいうと、多少の変化はあるが、大筋に変わりはなく昔のままである。

なのに、明らかに心象が違う。田舎で育った子どもに比べて、小さくなったとしか思えない。年齢を重ねるとともにそう思えるようになり、いまでは決定的にそうと思えなくなっている。大人と子ども、もの見方の違いということだけのことだろうか。

人物についても同じで、子どももこ

## 「畏敬の心象」



### 風俗歳時記

ろは知事や大臣といえど、とても偉い人のように思っていた。総理大臣などという、それはもう文字通り雲の上の人だった。

だがいまではちつとも偉い人とは思えない。それどころか高校生にも及ばぬ漢字力で、たびたび読み違えをするほどの教養で総理が務まるとなる（旧聞になりもつ）総理でなくなつたが、尊敬どころか呆れてしまう。高校生の学力にも及ばぬというのは、近所の高二の女子学生が「私はあの程度の漢字なら、絶対間違わずに読める」と自信をもって語るのだ。

昔は、畏敬に値する政治家が多かった。官僚や教師にも立派な人物がいた。人品に魅力を感じる存在感のある人も少なくなつた。それがいまでは畏敬に値する人物が稀になつてしまった。いま、仰ぎ見て気持ちがいいのは、大樹だけである。

鎮守の森の大樹がなつかしい。

(慧)



# GAIA CUATRO Japan Tour 2010 WORLD JAZZ × AURORA DANCE



ガイアクアトロ ジャパンツアー 2010

## ワールドジャズ× オーロラダンス

大地の鼓動、天空の躍動

—— 世界はこんなにも美しい。

2010年5月7日(金) 18:30開場 19:00開演

高知市文化プラザかるぽーと小ホール

全席自由 前売り:3,500円(当日:4,000円)

【チケット販売所】

高知市文化プラザミュージアムショップ 088-883-5052 / 高新プレイガイド 088-825-4335 / 高知大丸プレイガイド 088-825-2191  
高知県民文化ホール 088-824-5321 / 高知県立美術館ミュージアムショップ 088-866-8118

【通信販売】

直接購入が出来ない方は通信販売をご利用ください。必ず電話(088-883-5073)にてご予約の後、郵便振替口座(加入者名:(財)高知市文化振興事業団  
口座番号:01680-5-14869)に公演名を明記の上、チケットの合計金額と送料380円を合計した金額をご入金ください。入金確認後、簡易書留にて発送いたします。

主催:財団法人高知市文化振興事業団/エフエム高知

お問い合わせ:財団法人高知市文化振興事業団 TEL088-883-5071 <http://www.bunkaplaza.or.jp>